



応用生態工学会ニュースレター

No.86

Ecology and Civil Engineering Society (ECESJ)

2019 (令和元) 年 12 月 27 日 (木) 発行

〔発行所〕 応用生態工学会事務局 〒102-0083 東京都千代田区麹町 4-7-5 麹町ロイヤルビル 405 号室
TEL : 03-5216-8401 FAX : 03-5216-8520 E-mail : eces-manager@ecesj.com HP : <https://www.ecesj.com/>

〔発行者〕 応用生態工学会 (編集責任者: 幹事長 北村 匡, 事務局長 青江 淳)

1	はじめに.....	1
2	第 12 期新会長挨拶.....	2
3	応用生態工学会第 23 回総会／第 23 回広島大会報告	
3.1	応用生態工学会第 23 回総会報告.....	3
3.2	応用生態工学会第 23 回広島大会報告.....	8
4	応用生態工学会第 24 回大会の準備状況.....	9
5	行事開催報告	
5.1	応用生態工学会札幌 第 1 回北海道の応用生態工学 論文の解説と展望 1 開催報告	12
5.2	応用生態工学会札幌 第 2 回北海道の応用生態工学 全国大会の発表を札幌でも その 1 開催報告	13
5.3	応用生態工学会仙台『仙台湾南部海岸環境追跡プロジェクト ～東日本大震災後の砂浜環境について～』 開催報告.....	14
5.4	応用生態工学会富山 第 1 回氾濫原テキスト勉強会 開催報告	19
5.5	応用生態工学会名古屋 フィールドシンポジウム in 自然共生研究センター 開催報告	22
5.6	応用生態工学会福井 勉強会 魚道整備による地域の川づくり 開催報告	27
5.7	応用生態工学会新潟 勉強会 生態系ネットワークと地域再生	30
6	谷田一三先生 名誉会員に推戴.....	33
7	2019 年度行事の経過と今後の予定	33
8	事務局より.....	35

1 はじめに

今号では、第 12 期会長挨拶、第 23 回総会の報告、来年の札幌大会の準備状況、各地の活動状況など、学会の動きをお伝えします。

学会第 23 回総会報告を掲載しました

第 23 回総会は、大会最終日の 9 月 29 日（日）に開催され、第 12 期役員候補が承認されました。その結果、会長には甲村謙友（一財）国土技術研究センター理事長が就任いたしました。甲村新会長は、第 9 期の谷田会長、第 10 期の辻本会長のもとで理事を務められました。

また、谷田一三先生が当学会及び応用生態工学の発展に大きな功績が認められ、理事会から名誉会員の推薦を受け総会で承認されました。

学会第 23 回大会報告を掲載しました

今年の応用生態工学会第 23 回大会は、9 月 27（金）～30 日（月）に広島大学東広島キャンパスにおいて開催され、研究発表会に 365 名が参加し、熱心な発表と質疑が行われました。

詳細は、追って報告いたします。

来年の札幌大会の開催計画が決まりました

開催日程は2020年 9 月24日（木）～28日（月）、会場は北海道道立道民活動センター「かでる2.7」、大会実行委員長には中村太士北海道大学教授が選出されました。多くの会員の皆様の参加を期待しています。

退会の申し出は学会ホームページの退会フォームからお願いいたします

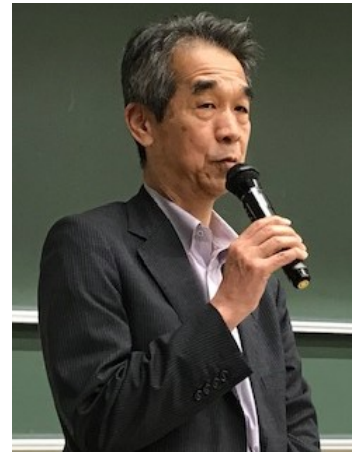
退会の申し出については、退会フォームのほかに、事務局へのメール、電話、年会費払込請求書の通信欄に記載等でなされています。事務局の見落とし等の原因の元になりますので、できるだけ退会フォームまたは件名に「退会の連絡」等明示したメールによる申し出をお願いいたします。

2 第 12 期新会長挨拶 甲村謙友（一財）国土技術研究センター理事長

応用生態工学会第 12 期会長に選任いただきました甲村でございます。

現在、一般財団法人国土技術研究センター理事長をつとめております。応用生態工学会では第 9 期谷田会長、第 10 期辻本会長のもとで理事を務めさせていただきました。

私は土木工学の出身で、建設省・国土交通省で主として河川分野、と言いましても、若い頃は技術的な仕事をしましたが、中年あたりからは技術行政的な仕事が多く、道路局や環境省、県にも勤務いたしました。国土交通省退職後は独立行政法人水資源機構理事長としてダム・水路の建設・管理に 6 年半携わり、その間、平成 25 年 9 月台風 18 号による桂川大出水の際の日吉ダム防災操作、平成 29 年 7 月線状降水帯による九州北部豪雨の際の寺内ダム防災操作、また、小石原川ダム建設におけるヤマネの巣箱調査と保全や、昨日口頭発表がありました川上ダム建設におけるオオサンショウウオの保護・移転等に諸先生にお世話になりながら関係しました。



本学会は、生態学と土木工学が共同して、その境界領域において新たな理論・知識・技術体系を構築し、もって「人と生物の共存」「生物多様性の保全」「健全な生態系の持続」を達成することを共通の目標としており、これまで多くの努力が積み重ねられ、先ほどの小石原川ダム建設や川上ダム建設に見られるように、応用生態工学のさまざまな知見が良好な国土基盤を形成する土木事業でも取り入れられて、環境保全が日常的に行われるようになっていきます。

国際的には Sustainable Development Goals (SDGs)、日本の公式訳では持続可能な開発目標となっていますが、私は Development は開発ではなく発展と訳して、持続可能な発展目標とした方が誤解が少ないと思うのですが、将来の世代のニーズを満たす能力を損なうことなく、今日の世代のニーズを満たすような社会を目指す努力がなされています。具体的には 17 の目標と 169 の達成基準が定められており、17 の目標の中には当学会と関係が深い「陸上生態系の保護、回復」、「強靱なインフラ整備」といった分野に加えて、最近の猛暑や豪雨等で実感が出てきている「気候変動への緊急対策」、さらには「貧困の撲滅」、「質の高い教育」「ジェンダー平等」等幅広い分野にまたがっています。人類と地球が継続的に繁栄するために、本学会も応用生態工学の分野における専門的知見と職業的倫理観に立脚した、客観的データに基づく仮説検証と現場における順応的管理をより深化させるとともに、社会学・経済学等とも連携した学際的な取り組みもより重要性を増してくると思われます。

皆さんとともに努力してまいりたいと思います。よろしくお願いいたします。

3 応用生態工学会第 23 回総会／第 23 回広島大会報告

3.1 応用生態工学会第 23 回総会報告

報告者：青江 淳 応用生態工学会事務局

第 23 回応用生態工学会総会は、第 23 回広島大会の 3 日目、2019 年 9 月 29 日（日）10 時 10 分～11 時に広島大学東広島キャンパス 理学研究科 E 棟 E102 で開催されました。

総会は、事務局長から、学会規約第 15 条第 4 項による総会成立要件（正会員の 5 分の 1 以上の出席）を満たしていることが報告され、総会議長に中電技術コンサルタント(株)山陰支社長の山原康嗣氏を選出して、総会が開始されました。

以下に、概要を報告します。

総会は江崎会長のご挨拶があった後、議事に入りました。

まず、報告事項である「2018 年度（平成 30 年度）事業報告」「第 4 次中期計画の事後評価」「第 12 期幹事の選出」について北村幹事長から報告があり、了承された後、以下の事項が審議されました。

1. 第 1 号議案 2018 年度（平成 30 年度）決算・監査報告が審議され、以下の 2018 年度（平成 30 年度）決算報告、監査報告が承認されました。

- ・2018 年度決算は、収支差額 1,667,638 円の黒字となった。

この黒字決算をもたらしたのは、予算に対して収入総額が 342,661 円増額となった一方、支出総額が 1,324,977 円の減額となり、相乗して黒字となったものである。

- ・収入の増額は、正会員会費・学生会員会費の減額があったにもかかわらず、賛助会員会費が大幅に増額となったことによる会費収入の 458,474 円の増額と助成金収入の 154,709 円の増額が寄与している。

学生会員会費については、予算額は会員登録人数に対して計上しているが決算額は 6 割程度となっている。学生会員は、大会時の研究発表のために当該年度のみ入会する場合が少なからず見受けられるため、2018 年度末で退会等の処理を行った。この処理を行った後は、会員登録人数と会費納入額の乖離は大幅に是正される。

賛助会員会費については、新規に 5 法人 5 口の加入があり、既会員の増口が 1 口あった。

助成金収入については、普及・連携委員会で各地域のイベントの助成金の取得状況について情報共有するなどの取り組みを進めており、イベント開催を他機関と共催とすることで費用を分担したケースや新規の助成先を得たケース等があった。

- ・支出の減額は、事業費の会誌編集費の 123,742 円、委員会活動費の 632,271 円、地域研究会費用の 710,201 円が主なものである。

会誌編集費は、会誌印刷費、会誌郵送費、J-STAGE 登載費・J-STAGE 投稿審査システム分担金、編集委員会交通費からなるが、会誌印刷費の占める割合が大きく、その増減は主に掲載論文数や掲載論文の種別等によって変動する。ちなみに過去 3 年間（2016 年度～2018 年度）の掲載論文数（カッコ内は総ページ）は、24（275 ページ）、28（243 ページ）、19（208 ページ）となっている。

また、委員会活動費は、委員会の開催方法の工夫（大会時の開催、メール会議等）などにより節減が図られたものである。

地域研究会費用は、イベントの開催数や個々のイベントのテーマ・外部講師や現地見学の有無等の活動内容によって毎年変動が生じる。

- ・以上の状況を概括すると、1,667,638 円の黒字は、賛助会員会費・助成金の増額、委員会活動費節減等によるところが大きい。

一方、正会員・学生会員の会員登録人数と会費収入の乖離が続いていることから、会費滞納者への督促等の取り組みを継続して進める必要がある。

なお、参考事項として「2019 年度事業実施状況・収支見込み」が説明され、了承されました。

2. 第 2 号議案 2019 年度（令和元年度）事業計画案、第 3 号議案 2019 年度（令和元年度）予算案が以下の内容で審議され、承認されました。

2020 年度予算案は、引き続き収支を一致させる均衡予算とすることを基本に作成した。

収入、支出とも、予算額は 2017 年度決算と 2018 年度決算の平均値を計上することを基本とするが、この基本と異なる計上をしている項目は次のとおりである。

○収入

- ① 会費収入は、2019 年 7 月 10 日時点の会員数に基づいて計上した。（2019 年度収支見込み参照）
- ② 事業収入の大会費については、大会を通常大会として開催した 2015 年度・2018 年度決算の平均額を計上した（2016 年度は 20 周年記念大会、2017 年度は 3 学会合同大会として開催したため）。
- ③ 英文誌 LEE 購読料収入は、2019 年 1 月 1 日時点の電子体、冊子体の購読者数、購読料に基づいて計上した。（2019 年度収支見込み参照）

○支出

- ① 委員会活動費は、次のとおりとした。
 - ・普及・連携委員会費は、活動費、地域イベント助成費ともに、今後の活動方針に基づき 2018 年度決算額と同額とした。
 - ・国際交流委員会費では、国際シンポジウムが隔年開催で 2020 年度は非開催年にあたるため、非開催年の 2018 年度予算と同額を計上した。活動費も同様とした。
 - ・情報サービス委員会費のうちホームページ管理費は、今後とも 2018 年度実績を踏まえることとし 2018 年度決算額と同額を計上した。
 - ・将来構想委員会費は、第 5 次中期計画作成年であることを考慮して、2018 年度予算額と同額を計上した。
 - ・テキスト刊行委員会費は、活動費については 2018 年度に引き続き、地域研究会の活動の一環として「氾濫原」テキストを使用した勉強会が予定されていることを考慮して、講師派遣等に要する費用、「中小河川」テキスト刊行の会議費用を加えて 2019 年度執行見込みと同額を計上した。
- ③ 大会費は、大会を通常大会として開催した 2015 年度・2018 年度決算額の平均額を計上した。
- ④ HP 整備費、その他費用では、ホームページの整備費用のほか、事業費の中で他項目以外に突発的に発生する費用（ただし、災害調査費用を除く）に対応する予算科目として、予備的経費を計上することとし、当期収支差額が 0 円となる範囲で、可能な金額を計上した。
- ⑤ 英文誌関連費の LEE 購読料支払いは、収入額と同額とした。ICLEE 事務局維持費は、必要額を計

上した。

以上に基づいて予算額を計上した結果、2020 年度予算案は、収入、支出ともに 18,315,810 円、収支差額 0 円の均衡予算となっている。

科 目	2020年度		2019年度		2018年度	2017年度
	予算(案)	設定根拠	予算	執行見込額	決算	決算
収 入	18,315,810		18,548,230	18,424,810	18,908,461	15,304,664
会費収入	11,656,000		11,488,000	11,656,000	11,522,474	11,246,190
正会員会費	5,238,000	873人×6,000	5,508,000	5,238,000	5,366,398	5,257,190
学生会員会費	218,000	109人×2,000	280,000	218,000	156,400	189,000
賛助会員会費	6,200,000	62口×100,000	5,700,000	6,200,000	5,999,676	5,800,000
雑収入	730,130		610,130	610,130	902,368	608,714
会誌別刷り収入	730,000	2017・2018年度決算の平均額を計上	610,000	610,000	860,436	608,634
受取利息	130	2016・2017年度決算の平均額を計上	130	130	12,216	80
その他	0		0	0	29,716	0
事業収入	3,580,000		3,759,000	3,759,000	3,743,100	1,098,960
大会費	2,500,000	2015・2018年度決算の平均額を計上	2,400,000	2,400,000	2,671,000	0
大会(研究発表会)参加費					2,024,000	
エクスカーショ参加費					27,000	
大会(懇親会)参加費					620,000	
地域講座参加費	930,000	2017・2018年度決算の平均額を計上	1,253,000	1,253,000	912,100	948,150
会誌等販売収入	150,000	2017・2018年度決算の平均額を計上	106,000	106,000	160,000	150,810
英文誌関連収入	319,680		611,100	319,680	495,810	537,600
LEE購読料	319,680	70人×4,320+2人×8,640	611,100	319,680	495,810	537,600
LEE広告掲載収入	0		0	0	0	0
助成金収入	2,030,000		2,080,000	2,080,000	2,244,709	1,813,200
河川基金	1,000,000	2019年度予算と同額を計上	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
助成金	1,030,000	2017・2018年度決算の平均額を計上	1,070,000	1,070,000	1,244,709	813,200
寄付金	0	2017・2018年度決算の平均額を計上	10,000	10,000	0	0
支 出	18,315,810		18,548,230	18,656,810	17,240,823	15,942,752
管理費	6,600,000	2017・2018年度決算の平均額を計上	6,400,000	6,400,000	6,387,076	6,819,844
事業費	11,246,130		11,387,130	11,787,130	9,969,403	8,292,883
会誌編集費	2,900,000	2017・2018年度決算の平均額を計上	3,000,000	3,000,000	2,676,258	3,067,672
ニュースレター発行費	0		0	0	0	0
会員募集費	0		0	0	0	84,348
会議費	1,020,000		1,030,000	1,130,000	939,001	1,085,136
総会費	50,000	2019年度予算と同額を計上	50,000	50,000	39,403	48,334
理事会費	460,000	2017・2018年度決算の平均額を計上	390,000	490,000	484,396	431,058
幹事会費	510,000	2017・2018年度決算の平均額を計上	590,000	590,000	415,202	605,744
委員会活動費	1,830,000		1,870,000	2,170,000	1,197,729	2,184,323
委員会関係費	1,630,000		1,670,000	1,970,000	997,729	1,984,323
普及・連携委員会費	1,000,000		1,000,000	1,000,000	977,129	612,473
活動費	300,000	2018年度決算額を計上	400,000	400,000	277,129	262,473
地域イベント助成費	700,000	2018年度決算額を計上	600,000	600,000	700,000	350,000
国際交流委員会費	100,000		500,000	500,000	0	1,369,250
活動費	100,000	2018年度予算と同額を計上	0	0	0	0
国際シンポ経費	0	2018年度予算と同額を計上	500,000	500,000	0	1,369,250
情報サービス委員会費	20,000		10,000	10,000	20,600	0
活動費	0	2017・2018年度決算の平均額を計上	0	0	0	0
ホームページ管理費	20,000	2018年度決算額を計上	10,000	10,000	20,600	0
将来構想委員会費	100,000	2018年度予算と同額を計上	50,000	50,000	0	0
技術援助委員会費	0		0	0	0	0
活動費	0	2018年度決算と同額を計上	0	0	0	0
河砂基準意見交換費	0	2018年度決算と同額を計上	0	0	0	0
テキスト刊行委員会費	400,000		100,000	400,000	0	0
活動費	400,000	2019年度執行見込み額と同額を計上	100,000	400,000	0	0
テキスト刊行費	0	2018年度決算と同額を計上	0	0	0	0
事務局改善WG費	10,000	2017年度決算と同額を計上	10,000	10,000	0	2,600
海外派遣費	200,000	2019年度予算と同額を計上	200,000	200,000	200,000	200,000
大会費	3,200,000	2015・2018年度決算の平均額を計上	3,200,000	3,200,000	3,187,001	67,937
公開シンポジウム					1,299,193	0
研究発表会					1,284,757	0
エクスカーショ					73,180	0
大会懇親会費					529,871	67,937
地域研究会費用	1,800,000	2017・2018年度決算の平均額を計上	2,200,000	2,200,000	1,839,799	1,803,467
災害調査費	0	2019年度予算と同額を計上	0	0	0	
HP整備費、その他費用	496,130		87,130	87,130	129,615	0
英文誌関連費	469,680		761,100	469,680	761,100	804,675
LEE購読料支払い	319,680	収入額と同額を計上	611,100	319,680	611,100	654,675
ICLEE事務局維持費	150,000	平年必要額	150,000	150,000	150,000	150,000
その他の支出	0		0	0	123,244	25,350
源泉所得税預り金	0		0	0	0	0
返金等	0		0	0	123,244	25,350
当期収支差額	0		0	232,000	1,667,638	638,088

3. 第4号議案 第11期役員選出が審議され、以下のとおり、役員が選出されました。

役員の任期は2年です。

会 長	甲村 謙友 (新任)	一般財団法人国土技術研究センター理事長
副会長	浅枝 隆 (再任)	埼玉大学名誉教授
	占部城太郎 (新任)	東北大学大学院生命科学研究科教授
	高村 典子 (新任)	国立研究開発法人国立環境研究所 生物・生態系環境研究センター琵琶湖分室フェロー
理 事	浅見 和弘 (再任)	応用地質株式会社技術本部技師長室技師長
	池内 幸司 (再任)	東京大学大学院工学系研究科教授
	島谷 幸宏 (再任)	九州大学大学院工学研究院教授
	杉尾 哲 (再任)	宮崎大学名誉教授
	中村 太士 (再任)	北海道大学大学院農学研究院教授
	西 浩司 (再任)	いであ株式会社国土環境研究所環境技術部技師長
	藤田 乾一 (再任)	株式会社大林組土木本部顧問
	武藤 裕則 (再任)	徳島大学大学院社会産業理工学部教授
	東 信行 (新任)	弘前大学農学生命科学部教授
	久保田 勝 (新任)	東北電力株式会社顧問
	佐川 志朗 (新任)	兵庫県立大学大学院地域資源マネジメント研究科教授
	関根 秀明 (新任)	株式会社建設技術研究所東京本社環境部部長
	竹門 康弘 (新任)	京都大学防災研究所水資源環境研究センター准教授
	藤田 光一 (新任)	公益財団法人河川財団河川総合研究所所長
	益岡 卓史 (新任)	株式会社建設環境研究所技術本部副本部長
監 事	成田 賢 (再任)	応用地質株式会社代表取締役社長
	渡辺 綱男 (再任)	一般財団法人自然環境研究センター上級研究員 (再任・新任の順、五十音順、敬称略)

4. 第5号議案 第12期幹事長が審議され、以下のとおり、幹事長が選出されました。

幹事長 北村 匡 (再任) 共和コンクリート工業株式会社取締役副社長

なお、副幹事長には、総会後に開催された第84回幹事会において吉村千洋氏が推薦され、第101回理事会において会長から任命されました。

幹事については、第99回理事会において次のとおり選出されました。

幹 事	石澤 伸彰 (再任)	応用地質株式会社地球環境事業部自然環境部長
	上野 祐介 (再任)	石川県立大学生物資源環境学部准教授
	笠原 玉青 (再任)	九州大学大学院農学研究院准教授
	片野 泉 (再任)	奈良女子大学大学院自然科学系准教授
	佐藤 高広 (再任)	株式会社復建技術コンサルタント都市・環境部副部長
	傳田 正利 (再任)	国立研究開発法人土木研究所 水災害・リスクマネジメント国際センター主任研究員

永山 滋也 (再任)	岐阜大学流域圏科学研究センター研究員
舟橋 弥生 (再任)	国土交通省水管理・国土保全局河川環境課河川環境保全調整官
山田 浩之 (再任)	北海道大学大学院農学研究院講師
五十嵐美穂 (新任)	日本工営株式会社基盤技術事業部環境部課長
久加 朋子 (新任)	北海道大学大学院工学研究院特任准教授
西廣 淳 (新任)	国立研究開発法人国立環境研究所気候変動適応センター主任研究員
柳川 晃 (新任)	独立行政法人水資源機構シニア活用室上席審議役
吉村 千洋 (新任)	東京工業大学環境・社会理工学院准教授
渡辺 敏 (新任)	株式会社ウエスコ業務推進本部企画開発室室長

5. 第6号議案 名誉会員の推戴が審議され、応用生態工学会並びに応用生態工学の発展に大きな功績があった谷田一三先生について、名誉会員への推戴が承認されました。

3.2 応用生態工学会第23回広島大会報告

追って報告いたします。

4 応用生態工学会第 24 回札幌大会の準備状況

第 24 回札幌大会実行委員会

1. 実行委員・役割分担

別紙のとおり

2. 大会日程

令和 2 年 9 月 24 日 (木) ～9 月 28 日 (月)

⇒ 令和 2 年 9 月 24 日 (木) : 自由集会 (北海道内の話題を中心に) ※

令和 2 年 9 月 25 日 (金) : 研究発表会 ポスター発表、自由集会

令和 2 年 9 月 26 日 (土) : 研究発表会 口頭発表、自由集会、懇親会

令和 2 年 9 月 27 日 (日) : 幹事会・理事会・総会 (午前)、公開シンポジウム (午後)

令和 2 年 9 月 28 日 (月) : エクスカーション

3. 公開シンポジウム

「未来の治水を考える：国土と生態系の強靱化を目指して」の事業名で河川基金助成を申請済み

4. エクスカーション

視察場所 (案)

- ・札幌市内・豊平川流域／豊平峡ダム見学⇒河床低下⇒豊平川さけ科学館⇒サケ産卵床造成箇所、精進川 (多自然川づくり, サクラマス遡上・産卵時期)
- ・千歳・胆振方面／千歳川舞鶴湧水地, 千歳水族館 (さけのふるさと館), 勇払原野・勇払川, 苫小牧演習林, 白老ウポポイ (アイヌ民族博物館ほか)

5. 会場

(研究発表会・自由集会)

- ・北海道道立道民活動センター「かでる 2.7」※2010 年札幌大会の会場

札幌市中央区南 2 条西 7 丁目 (JR 札幌駅 徒歩 13 分)

ポスター会場 : 1 階展示ホール

口頭発表・自由集会 : 5 階研修室 (108 名), 7 階会議室 (96 名), 8 階会議室 (144 名)

(懇親会)

- ・サントリーガーデン 晃

札幌市中央区北 5 条西 5 丁目 JR5.5 ビル 8F (JR 札幌駅 徒歩 1 分)

(公開シンポジウム)

- ・北海道大学工学部オープンホール (364 名) ないし札幌エルプラザホール (350 名)

応用生態工学会2020札幌大会 実行委員会

大会実行委員長 中村 太士 副実行委員長 久加朋子, 根岸淳二郎, 渡辺恵三

担当	氏 名	所 属
1	赤坂 卓美	帯広畜産大学
2	有賀 望	札幌市豊平川さけ科学館
3	池田 幸資	パシフィックコンサルタンツ (株)
4	石田 憲生	(株) ドーコン 河川環境部
5	石山 信雄	道総研 林業試験場
6	岩瀬 晴夫	(株) 北海道技術コンサルタント
7	植田 和俊	パブリックコンサルタント (株)
8	卜部 浩一	道総研 さけます内水試
9	大石 哲也	土木研究所 寒地土木研究所
10	折戸 聖	北海道栽培漁業振興公社
11	紀国 聡	(株) 建設技術研究所
12 副実行委員長	久加 朋子	北海道大学大学院工学研究院
13	栗原 啓伍	(株) ネクスコ・エンジニアリング北海道
14	上月 佐葉子	パシフィックコンサルタンツ (株)
15	斎藤 静彦	日本工営 (株)
16	坂元 直人	(株) エコテック
17	関 基	八千代エンジニアリング (株)
18	田崎 冬記	(株) 北開水工コンサルタント
19	田中 千暉	和光技研 (株)
20	玉田 祐介	(株) 長大
21	千葉 悠子	(株) 北海道技術コンサルタント
22	鳥本 博靖	防災地質工業 (株)
23 実行委員長	中村 太士	北海道大学農学研究院
24	中村 篤史	(株) エーティック
25	長本 大介	(株) 建設環境研究所
26	布川 雅典	土木研究所 寒地土木研究所
27 副実行委員長	根岸 淳二郎	北海道大学大学院地球環境科学研究院
28	浜田 拓	(株) 地域環境計画
29	福家 菜緒	北海道大学農学研究院 中村研究室事務
30	藤井 和也	(株) 福田水文センター
31	丸山 緑	明治コンサルタント (株)
32	三田 賢哉	(株) 開発工営社
33	山田 芳樹	(株) ドーコン 環境保全部
34	山田 浩之	北海道大学農学研究院
35 副実行委員長	渡辺 恵三	(株) 北海道技術コンサルタント

第24回札幌大会 役割分担

大会実行委員長	中村太士	…総括
副	根岸淳二郎、久加朋子、渡辺恵三	…全体把握

北大連絡係 福家、相談役 岩瀬

部会	主な役割 (案)	部会長	メンバー
学会事務局	- 大会申し込み受付・参加者名簿管理・参加費管理 - 総会・役員会の企画運営 - 理事会、幹事会との連絡調整	青江事務局長	
学会事務局 (情報サービス)	- 大会実行委員 ML 調整 - web 参加申し込みフォーム作成 - 大会 HP 更新	沖津	
庶務	- 実行委員会招集、準備 - 学会事務局との連絡 - 大会案内・チラシ作成 - 後援依頼 - C P D プログラム申請、C P D 受講証明準備 - 学会 ML での情報発信 - 予算管理 - 受付 (学会事務局の補助、金銭管理は学会事務局) - 当日弁当手配	渡辺	三田、中村篤史、坂本、千葉 山田(芳)
会場部会	- 会場レイアウト検討、人員配置検討 - 必要備品、機材の抽出 - 案内看板作成、設置 - 会場案内 - 記録 (カメラ)	石田	丸山、田中、鳥本、大石、上月、池田
会員サービス部会 (仮)	賛助会員展示、さくま書店出店、調査機器・解析ソフトの紹介など、会員へ有益な情報を提供するための企画、調整	田崎	浜田
プログラム部会 口頭発表・ポスター発表 自由集会部会	- プログラム作成 (部屋割、時間割、発表者への調整) - 座長依頼 - 研究発表講演集原稿のクロスチェック	ト部	紀國、齋藤
表彰部会	【表彰サポート】(幹事表彰担当と協働) - 審査対象有資格者の事前確認と当日の本人確認 - 審査員選定、依頼? - 採点用紙の集計、結果整理? - 表彰者への連絡? - 表彰状等の準備 - 記録	赤坂	玉田
公開シンポジウム部会	- シンポジウムのテーマ作成 - 基調講演者、パネルディスカッション企画、招聘依頼 - 会場機材準備 - 当日進行、記録	石山	長本、栗原
エキスカーショ部会	- 企画 - 関係機関の調整、手配 - 当日運営、記録	藤井	植田、有賀、折戸、布川
懇親会部会	- 懇親会企画・調整 - 当日進行、記録	山田(浩)	関

5 行事開催報告

5.1 応用生態工学会札幌 第 1 回北海道の応用生態工学 論文の解説と展望 1 開催報告

～ 「小さな自然再生」と「きっと役立つ省力化のモニタリング技術」～

報告者：応用生態工学会札幌 普及・連携委員

渡辺恵三 (株)北海道開発コンサルタント

日時：2019 年 5 月 31 日 (金) 13:30～17:00

会場：札幌エルプラザ 環境研修室

土木学会 CPD 認定プログラム 3.3 単位

参加者 58 名

テーマ 1 「小さな自然再生のすすめ」

論文の解説と展望

「複数の手作り魚道はさけ科魚類の生息場所の回復に寄与したのか？」

町田善康 (美幌町博物館 学芸員)

関連講演 「小さな自然再生のすすめ」

「小さな自然再生について」 後藤勝洋 (日本河川・流域再生ネットワーク)

「多自然川づくりと小さな自然再生」 岩瀬晴夫 (小さな自然再生研究会)

「小さな自然再生の事例紹介」 有賀望 (札幌市豊平川さけ科学館)

テーマ 2 「きっと役立つ省力化のためのモニタリング技術」

論文の解説と展望 「全周魚眼スマートフォンカメラを用いた水生生物の遠隔モニタリング」

ほか、遠隔カメラや画像処理を用いた水鳥やトンボ類、植生の監視事例についても

山田 浩之 (北海道大学農学研究院基盤研究部門生物環境工学分野)

話題提供

「AI を活用したフィールドモニタリング」 橋本有悟 ((株)北海道技術コンサルタント)

北海道をフィールドとした応用生態工学の研究は多い。また、応用生態工学の研究者・技術者も多い。そこで、会員サービスの一環として、学会誌に掲載された論文のうち、北海道をフィールドとした研究・事例や北海道在住の研究者や技術者が著者(連名含む)の論文の解説と展望についてお話しいただく会を会誌編集委員と共催で開催しました。

この企画の第 1 回目は、当時最新号・Vol. 21 No. 2 (2019) に掲載された事例研究「複数の手作り魚道はさけ科魚類の生息場所の回復に寄与したのか？」について町田善康さん(美幌博物館)。「全周魚眼スマートフォンカメラを用いた水生生物の遠隔モニタリング」について山田浩之さん(北海道大学農学研究院)から、論文の内容に加え、日々の研究活動等も紹介いただきました。

また、町田さんの論文に関連して「小さな自然再生」をテーマに、後藤勝洋さん(日本河川・流域再生ネットワーク、(公財)リバーフロント研究所)、有賀望さん(札幌豊平川さけ科学館、札幌ワイルドサーモンプロジェクト)、岩瀬晴夫さん(小さな自然再生研究会)らの講演。山田さんの論文に関連して「きっと役立つ省力化のためのモニタリング技術」のひとつとして、橋本有悟さん((株)北海道技術コンサルタント)から AI を活用したフィールドモニタリングの事例について紹介いただきました。

なお、進行と講評(好評)は、会誌編集委員のト部浩一さん(道総研さけます内水試)と石山信雄さん(道総研森林)が務めました。



会場の様子



町田義康さん



山田浩之さん

5.2 第2回北海道の応用生態工学 全国大会の発表を札幌でも その1 開催報告

報告者：応用生態工学会札幌 普及・連携委員

渡辺恵三 (株)北海道開発コンサルタント

日時：2019 年 11 月 1 日 (金) 13:15~17:40

会場：北海道大学工学部アカデミックラウンジ (懇親会：北海道大学北部食堂)

土木学会 CPD 認定プログラム 4.0 単位

参加者 98 名

発表演題および発表者

- ・ 北海道の猛禽類の生態と分布 玉田祐介((株)長大/北海道猛禽類研究会)
- ・ 北海道北部地域におけるオジロワシの潜在生息適地推定 赤坂卓美(帯広畜産大学)
- ・ イシカリミドリカワゲラ成虫の河川横断方向における分布 中川智裕(北海道大学)
- ・ 岩盤河床の礫河床への復元に向けた取組みの底生動物による評価 布川雅典(寒地土木研究所)
- ・ 流域地質が河川上流域の水温および冷水性魚類の分布・生活史に与える影響
石山信雄(北海道立総合研究機構)
- ・ 石狩川旧川群における肉食性外来魚類の分布状況と食性把握について
藤井和也((株)福田水文センター)
- ・ 相補性解析を用いた石狩川旧川・湖沼群の保全優先度の設定 植村郁彦((株)ドーコン)
- ・ 都市河川における河床地形の変化とサケ産卵環境への影響について
有賀望(札幌市豊平川さけ科学館)
- ・ 釧路川茅沼地区の旧川復元による湿原植生再生効果の検証 石田憲生((株)ドーコン)
- ・ 植生の河岸拘束力の違いが蛇行流路の流路変動特性に与える影響 久加朋子(北海道大学)

「北海道の話題なのに、全国大会（道外）に行かないと聞けない。」「北海道の話題なのに、北海道で発表する機会がない。」という声に応え、表題のとおり「全国大会の（北海道に関する）発表を札幌でも」を開催しました。

今年の全国大会（2019. 9. 27～30／広島大学）では、ポスター発表 71 件のうち 4 件、口頭発表 42 件のうち 8 件の北海道に関する発表がありました。今回は、そのうち 10 件を札幌でも発表いただきました。

発表は、全国大会での口頭発表時間 15 分（発表 12 分質疑 3 分）にあわせ、3～4 題のセクション毎に 20 分の関連討議の時間を設けました。が、その関連討議の時間を確保できないほど、各発表後の多くの質疑・議論が交わされました。

話題、発表者、参加者がともに北海道という地域性を反映した活発な研究発表会となりました。来年 2020 年の全国大会は札幌です。懇親会では、来年の盛会に向けて盛り上がりました。



発表会の様子



懇親会にて

5.3 応用生態工学会 仙台 フィールドシンポ

『仙台湾南部海岸環境追跡プロジェクト～東日本大震災後の砂浜環境について～』

2019 年（令和元年）8 月 31 日（土）フィールドツアー

報告者：応用生態工学会仙台 普及・連携委員

佐藤高広（株）復建技術コンサルタント

応用生態工学会仙台では、東日本大震災から 10 年の節目を想定し、仙台湾南部海岸の海岸堤防に着目したフィールド調査を実施しました。なお、本取り組みは今回の調査だけで終了ではなく、今後も継続していく計画であります。

1. 開催趣旨

仙台湾南部海岸では、平成 23 年 3 月に発生した東日本大震災の津波災害後の海岸堤防の復旧・復興において自然環境への配慮の観点から様々な影響緩和を行うとともに、『緑の防潮堤』等のより前向きな事業も進めてきました。海岸堤防の復旧・復興に関する影響緩和効果については、施工後数年の事業者によるモニタリング調査においてその効果が確認されていましたが、復旧・復興事業が完了したことによりモニタリングも終了し、その後の経過が分からなくなりつつあります。

応用生態工学会仙台では、海岸堤防の復旧・復興後の環境変化に関して応用生態工学的な側面から長期的にモニタリングを実施し、今後の海岸堤防等の計画・設計の在り方、海岸堤防設置時の環境保全の具体的方法等についての知見を収集し、幅広く発信することを企画しました。また、わが国には、河川・海岸地域における災害復興や国土強靱化における生態系機能の活用事例が少ない中で、仙台湾南部海岸の防潮堤と生態系回復状況の事実を周知させることは、被災地域で取り組んでいる者の責務である

と考えられます。

また、仙台市エリアでは NPO による市民活動として、仙台湾南部海岸をフィールドとして定期的なフットパスを開催していることから、将来的には、このような団体にもご参加頂き、環境モニタリングを地域イベントとして実施することも予定しています。今年開催するイベントはそのための予備的な調査としての位置づけでもあり、今後、専門家と市民が参加することにより持続的に実施可能な砂浜環境のモニタリング方法の確立に資することを目的としています。

2. 実施体制・参加者内訳等

主催：応用生態工学会

協賛：(一社)東北地域づくり協会

後援：国土交通省東北地方整備局・宮城県・(一社)建設コンサルタンツ協会東北支部

実施主体：応用生態工学会仙台

3. フィールドツアーの実施状況

日時：2019 年 8 月 31 日(土) 9:30～15:00

具体的な調査内容：移動性が低い昆虫類及び植物並びに物理環境について、以下の 3 班体制で実施

(1)植物班；①注目種調査 ②コドラート調査

(2)昆虫班；①トラップ調査 ②センサス調査

(3)物理班；①地形横断測量 ②土壌物性調査 ③UAV 撮影(事前に実施)

主な対象者：応用生態工学会の会員、東北地域および北海道の研究者、行政関係者、市民団体

参加者数：フィールド調査 58 名

参加学識者：以下のとおり

表 1 参加学識者一覧

氏 名	専門	備考
占部城太郎 (東北大学)	底生動物	
萱場祐一 (土木研究所)	河川工学・河川生態系	事務局代表
黒沢高秀(福島大学)	植物	
平吹喜彦 (東北学院大学)	植物	
溝田浩二 (宮城教育大学)	昆虫類	
松島 肇 (北海道大学)	海岸生態系・景観	

【フィールド調査の実施状況】

9:30～10:00 趣旨説明・調査方法説明

10:00～12:00 現地調査：植物・昆虫類・物理環境の各班で調査を実施
(専門性の高い調査を実施)

12:00～13:00 昼食

13:00～15:00 市民参加型の生物調査・結果概要の説明

15:00 記念撮影・解散

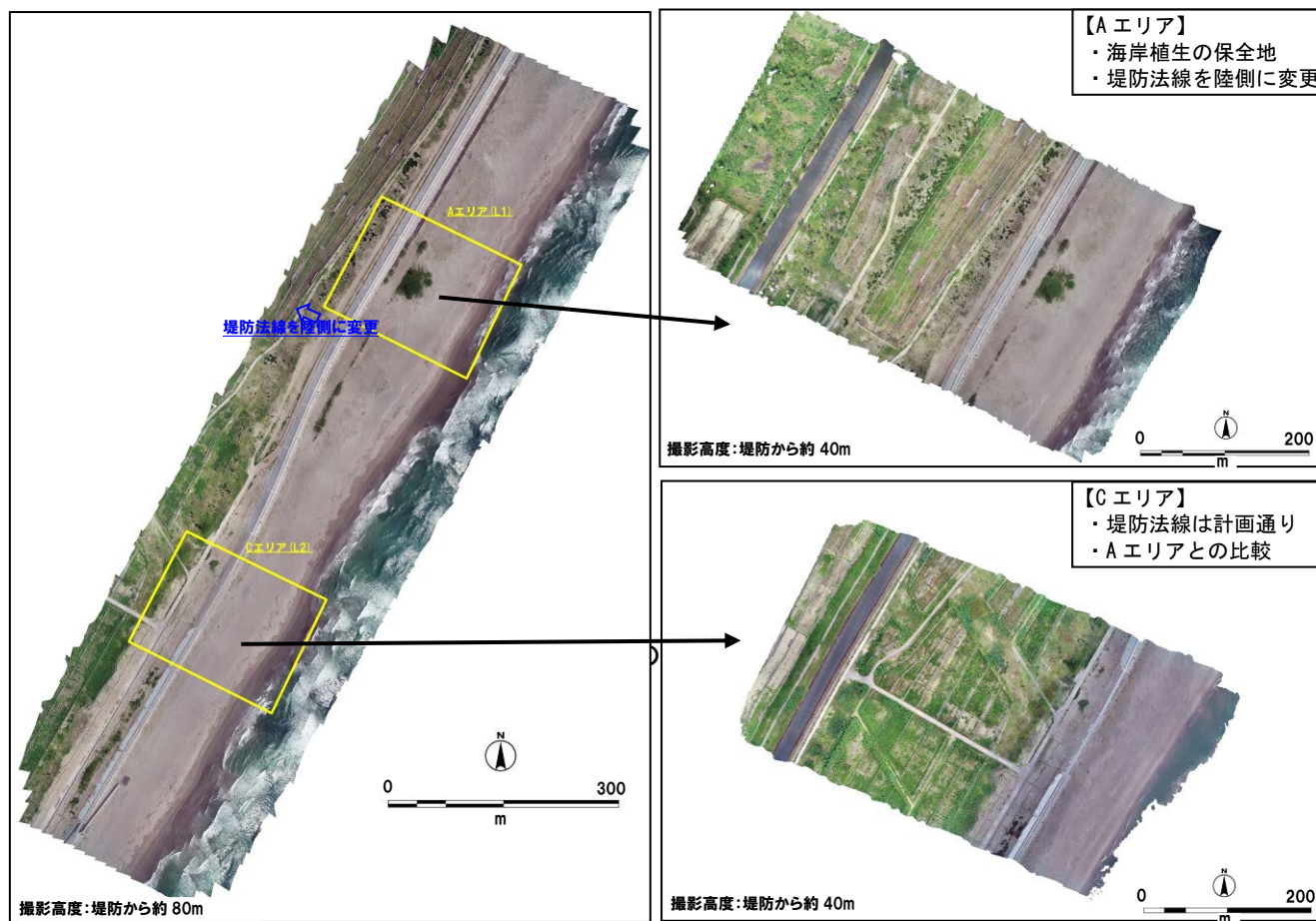


写真 1 調査実施状況



事前の全体説明(午前の部)
萱場祐一 水環境研究グループ長(土木研究所)



事前の全体説明(午前の部)
萱場祐一 水環境研究グループ長(土木研究所)



調査実施状況
(測線上で各種調査が実施)



植物調査の実施状況
(コドラート調査)



昆虫調査の実施状況
(市民参加型のセンサス調査説明)



物理環境調査の実施状況
(トータルステーション地形横断測量)



記念撮影
(堤防から撮影)



記念撮影
(UAV で上空から)

ご指導いただいた先生より「震災直後から現場を見てきたが、植生の回復等も徐々に良好になってきており、こういった活動を追跡していくことが重要」、「井土浦では市民活動を通じて地元の人にも関わりをもってもらっており、自分で体験することで愛着がわいてくる（関心を持ってもらえる）」、「オオハマガヤは外来の海浜植生の中でも特に注意が必要で、他の砂丘植生に大きな影響あり」等の意見を頂いた。

東日本大震災から 8 年が経過し、復興事業の進捗も進む中、海岸堤防の在り方について生態系及び海岸管理上の現状と課題等について知見を集積することは、震災後のか海岸生態系の回復の理解につながり、今後の適正な海岸堤防の管理の実現に大きく寄与しており、有意義なデータが取得できました(調査結果のとりまとめは現在実施中)。なお、本成果を取りまとめて、応用生態工学会としての研究のあり方、市民参加を想定した調査手法、今後の河川・海岸環境保全の在り方についてなど、今後の研究や活動の方向性について次年度以降の調査方針を検討し、震災 10 年の節目に向けたイベント企画につなげていきます。

4. おわりに

本大会には多くの皆様にご参加いただき、予定の行程を無事終えることができました。

今回は異なる分野の研究者、行政関係者、市民団体から様々な視点で、工学・生態学・行政・市民活動等の多様な内容を盛り込むにあたり、携わっていただいた皆様には企画段階から当日の運営まで快くご協力を賜りました。

本大会の運営においては、大学関係者、東北地方整備局、宮城県、多くのコンサル会員、一般市民の協力により実行することができました。運営にご協力いただいた応用生態工学会仙台の実行委員の皆様にご心より感謝申し上げます。

5.4 応用生態工学会富山 第1回 テキスト勉強会 開催報告

～河道内氾濫原の保全と再生__布施川を例として～

報告者：応用生態工学会富山

増山繁雄 北陸コンサルタント(株)

1. 概 要

応用生態工学会 富山地域研究会では、令和元年 11 月 12 日（火）に応用生態工学会 第1回 テキスト勉強会を開催しました。

今回の勉強会は、今年 9 月に応用生態工学会から発行された「応用生態工学会テキスト 河道内氾濫原の保全と再生」を活用した初めての勉強会として行われました。テキストの説明は新川学びの森天神山交流館（魚津市）で行い、その後テキストの内容に関する理解を深めるために、中小河川である片貝川水系右支布施川に移動し、現場を見ながら討論を行いました。今回の出席者は、34 名でした。



富山県立大学 高橋先生による開会挨拶

2. テキストの説明

最初に徳島大学の河口准教授（テキスト刊行委員会委員長）よりテキスト刊行の趣旨説明があり、その後テキストの内容について、岐阜大学の原田准教授、永山研究員から説明を受けました。このテキストは、大河川を対象として書かれているのですが、中小河川にも活用できる部分についても説明を受けました。以下に各章の主な内容をまとめます。



河口先生によるテキストの趣旨説明

第1章 河道内氾濫原の定義と生態的機能

氾濫原は、溢れた水が浸水する範囲で、自然界ではかなり広い領域があったが、現在では河道内氾濫原という形で、堤防で仕切られた場所にだけ残されている。

河道内氾濫原とは、原始的な氾濫原とは異なるものの、洪水攪乱によって特徴づけられる「氾濫原的な環境」が堤外地に残った領域で、微小な生物を含む多数の生き物が存在している。氾濫原の代替的な機能を持っていた水田も徐々にその面積を減らす中、河道内氾濫原で見られる生き物の生息場の機能が今後極めて重要である。

第2章 劣化する河道内氾濫原

河川整備事業は、河道の付け替えや直線化し河道を大きくして両側に連続堤をつくることを基本としている。これによって、氾濫原が劇的に安全になるが、川と完全に切り離された。また、土地改良事業により、安全になった氾濫原を完全な陸地に変え、かんがい排水事業により用排水路が分離され、水みち、ワンド、たまりに依存した生き物の生息域を奪う結果となった。

河道内氾濫原では、“樹林化”といわれる景観レベルの変化が起きている。ダムによる流量や土砂レジームに対する人工的な影響、砂利採取、河道改修による地形変化などの要因が絡んでいる。



永山先生による講義

第3章 河道内氾濫原の保全と再生

現状では、“氾濫原環境の劣化区間”を明確にし、氾濫原環境が良好な区間は維持したうえで、劣化区間における氾濫原環境の再生を高水敷掘削等の治水整備、自然再生事業を駆使しながら行うことが現実的である。実践のための考え方は、①治水を目的とした河道掘削、樹木伐採等の際に良いところは残し、劣化しているところはできる限り再生を図る。②川の環境は時間を追って変化するものというプロセスを理解し、これが保全・再生されるよう働きかける。③再生したエリアは、直後が一番激しく変化するので注意深く監視し、問題があれば修正し、その後の計画・設計に反映し、PDCA型の進め方が大切である。



原田先生による講義

具体的なアプローチとして、河道掘削、堰等による水位上昇、人工的な氾濫原の拡大、ダムによる流況改変（人工的な洪水）、人為的な土砂供給（堆砂対策、置土）について整理されている。河道掘削は、区間によって川の振舞いは違うので、設計する上で重要な検討要素は掘削する高さであり、これによってその後経過に大きな違いがあることが明らかになってきている。

第4章 保全と再生の実践

諸外国における事例4例、日本国内における事例3例が、統一したセクション区切りでまとめられており、横断的な見方をすることができる。

3. 現地討論（説明者 新川土木センター河川班 八倉巻班長、高田技師）

現地へ移動し、布施川の概要、改修計画の概要、河道掘削後の状況の説明を受けました。布施川では、引堤・護岸の整備、河床掘削が行われ、施工後に一旦平坦で単純化した河道を、その後の出水等による自然の流れによる瀬や淵の再生を図る取り組みが行われているとのことでした。修正された滞筋の状況を現地で確認しながら、河道幅の決め方、根入れ等について質疑が行われました。

原田先生より、今後のモニタリングが重要であることと、中小河川における河道内氾濫原（中水敷、

湾曲部、工作物周辺、霞堤周辺)をよく観察することが重要であることが説明されました。

左支小川寺川合流点では、中小河川に残された河道内氾濫原である合流点は、唯一川幅に余裕があるところで、生き物の避難場所として機能している。この合流点の形状は、今の状態が非常に良い形になっており、これをスムーズに修正する必要はないことや左岸側から合流している農業用排水路にも注目し、水の連続性に配慮すれば、生き物の生息範囲を水田等広範囲に広げることができるとの説明を受けました。



新川土木センターによる現地の説明

4. おわりに

10月の台風第19号では河川氾濫による甚大な被害が関東甲信越、東北を中心に発生しました。

今回の災害の特徴は、支川合流点に氾濫が集中していることで、合流点処理の緊急な対策が必要となります。一方、支川合流点は、生物の多様な生息環境として重要な場所でもあり、今後の災害復旧工事においては、治水と環境を一体的に進める必要があります。

今回のテキスト勉強会では、河道内氾濫原の保全と再生について、これまでの知見を整理し、わかりやすく説明して頂きました。また、中小河川の支川合流点の地形、河道状況、環境などを現地で確認し、その重要性と対応について学ぶことができました。今後、テキスト勉強会は全国で開催されると伺っていますので、テキストを活用して頂き、治水の向上と共によりよき河川環境が形成されることを願います。

今回の勉強会の講師の方々、参加いただいた皆様及びスタッフの皆様、どうもありがとうございました。次回も宜しくお願い致します。



富山河川国道事務所 副所長 渡邊 重紀氏による閉会挨拶



合流点をバックに記念撮影 (右側が布施川)

5.5 応用生態工学会名古屋

フィールドシンポジウム in 自然共生研究センター 開催報告

報告者：応用生態工学会名古屋

小川 遼 日本工営(株)

1. 行事概要

(1) 行事名

フィールドシンポジウム in 自然共生研究センター

ー河川における植生動態の理解と樹木管理への展望ー

(2) 行事の趣旨

近年、全国の多くの河川で河道内の樹林化が報告されています。河道内樹木は有機物の生産や生物に生息場を提供する機能を有する一方で、流速を弱める作用により土砂堆積、高水敷の形成や川幅の縮小を引き起こします。特に、洪水時には植生の抵抗により水位上昇が起り、治水上の問題が生じている場合もあります。また、河道内樹木を伐採しても、時間が経過すると再樹林化するといった管理上の課題も見られています。河道内樹木の動態について理解を深めること、また適切な管理手法を確立することは、今後河川を適切に管理していく上で重要な課題であると考えられます。

本フィールドシンポジウムでは、河川環境について実践的な研究が行われている国立研究開発法人 土木研究所 自然共生研究センター及び国営木曽三川公園 138 タワーパークにおいて、最新の知見や研究成果について紹介いただき、また各方面の実務者及び専門家から河道内樹木の管理の現状、伐採・掘削後の再繁茂対策、河畔林の動態、樹林化の現状と展望などについて知見を紹介いただくことで、河川における植生動態についての理解を進め、今後の河道内樹木の管理について考えることを目的として実施しました。

(3) 行事開催日・場所

開 催 日：令和元年 11 月 26 日（火）10:00～14:00 フィールドツアー

15:00～17:30 シンポジウム

開催場所：岐阜県各務原市(フィールドツアー)、愛知県一宮市(シンポジウム)

(4) 行程

■フィールドツアー：自然共生研究センター 森研究員

①自然共生研究センター会議室（集合）→屋上→実験河川→自然共生研究センター会議室（昼食）→138 タワーパーク（木曽川河川敷見学）→一宮スポーツ文化センター（シンポジウム会場）

■シンポジウム

基調講演（講演 30 分×4 題）

①：「河道内樹木管理計画と現状と河道管理」

中部地方整備局 木曽川上流河川事務所 内田雅之 管理課長

②：「河道内樹木の伐採および掘削後の動態と再繁茂対策」

～多自然川づくりとしての植生管理～

自然共生研究センター 森照貴 研究員

③：「礫床河川の河畔林とその動態」

東京農工大学 吉川正人 准教授

④：「河川の樹林化課題に対する研究の現状と将来展望」

芝浦工業大学 宮本仁志 教授

意見交換 (30 分)

主催：応用生態工学会 名古屋
 後援：国土交通省 木曽川上流河川事務所



フィールドシンポジウムin自然共生研究センター

ー河川における植生動態の理解と樹木管理への展望ー

開催日：令和元年11月26日(火)

ー会場へのアクセスー

 フィールドツアー シンポジウム 懇親会

フィールドツアー 10:00～14:00(9:30受付開始)

集合場所：水辺共生体験館（河川環境楽園内） 定員：40名 参加費：2,000円
 見学場所：①自然共生研究センター ②ツインアーチ138（地上100mから木曽川をのぞむ）

- ・フィールドツアーに参加される方は、お弁当とお茶がついています。必要に応じて、飲み物・雨具をご持参のうえ、動きやすい服装、履物でご参加下さい。
- ・悪天候によりフィールドツアーを中止する場合は、参加者に事前にご連絡します。
- ・フィールドツアー参加者は、バスでシンポジウム会場まで移動となります。バスは水辺共生体験館へは戻りませんのでご注意ください。

シンポジウム 15:00～17:30(14:30受付開始)

会場：一宮スポーツ文化センター 小ホール 定員：100名 参加費：無料

①講演

「河道内樹木管理計画と現状と課題」	（中部地方整備局 木曽川上流河川事務所）
「河道内樹木の伐採および掘削後の動態と再繁茂対策」	（自然共生研究センター 森照貴 研究員）
「礫床河川の河畔林とその動態」	（東京農工大学 吉川正人 准教授）
「河川の樹林化課題に対する研究の現状と将来展望」	（芝浦工業大学 宮本仁志 教授）

②意見交換

懇親会 18:00～20:00(17:45受付開始)

会場：クラシックホテル ガーデン アンシエヌ（愛知県一宮市栄3-3-10（アパホテル尾張一宮駅前））
 定員：40名 参加費：5000円

申込み方法(申込み期限：令和元年11月21日)

以下①～④を記入の上、E-mailからお申し込みください。

①所属 ②氏名 ③連絡先(E-mailアドレス 及び 当日連絡可能な携帯電話番号)
 ④参加希望のイベント(フィールドツアー、シンポジウム、懇親会)

申込み先E-mail: eces_fieldsymposium@tamano.co.jp

問い合わせ先
 応用生態工学会 名古屋 (担当：小松、小川) E-mail: eces_fieldsymposium@tamano.co.jp
 ※土木学会の継続教育 (CPD) プログラムとして登録申請中。

(5) 参加者

■フィールドツアー：36名

■シンポジウム：61名

(6) 概要（フィールドツアー）

1) 自然共生研究センター

① 研究紹介・実験棟の見学

自然共生研究センター（以下、センター）の森照貴研究員より、センターの施設及び研究内容について、講義室で紹介があった後、研究棟屋上にて樹林化抑制に関する研究の一環として取り組んでいる、ヤナギの遮光実験に関して説明を受けた。ヤナギは一般的に陽樹とされるが、遮光されても容易に枯れないことや、生長初期段階の方が繁茂を抑制しやすい可能性があること等について説明を受けた。



森研究員による説明



ヤナギ遮光実験状況の見学

② 実験河川の見学

実験河川では、森研究員よりセンターの実験河川の概要及び現在までに取り組まれてきた実験内容について説明を受けた。センターは流路延長 800m の実験河川 3 本を有しており、世界最大規模の施設となっている。実験河川には、ワンドや氾濫原、直線区間・コンクリート護岸など、様々な河川環境が造成されており、流量のコントロールによる洪水の発生等により、様々な河川空間要素を再現し、操作実験を行うことが可能である。

実験河川を見学しながら、ヨシの根茎移植によるヤナギの抑制に関する実験、河川敷の切り下げ高さと植生変化との関係について、研究成果の説明を受け、河川環境と樹林化に関する理解を深めた。



実験河川の見学状況①



実験河川の見学状況

③ 138 タワーパーク

一宮市のシンボルであるツインアーチ 138 の展望室から、木曽川本川及び南派川河川敷を見学した。木曽川上流河川事務所早田氏から、木曽川における過年度からの樹林伐採状況及び現在までの変遷、今後の伐採予定等についての説明を受けた。上空から見ることで、木曽川の現況を把握するとともに、近年伐採された箇所においても、樹林化が進行している様子をうかがうことができた。



138 タワーからの見学状況



木曽川河川敷（上流側）の状況

(7) 概要（シンポジウム）

講演では、河道内樹木について 4 題の発表が行われた。1 題目として、木曽川上流河川事務所の内田雅之氏から、木曽川における河道内樹林の状況、異なる伐採方法による樹林再生状況の違い、今後の樹林化抑制に対する課題等について、河川管理者の立場から説明頂いた。2 題目として、自然共生研究センターの森照貴研究員からは、鬼怒川で高水敷を掘削した後の再生状況、ヤナギやハリエンジュの再生の特徴等に関する説明があり、また生物の生息環境としての草地の重要性について問題提起された。3 題目として、東京農工大学の吉川正人氏から、河川におけるヤナギ類の種による生態的特性の違いとセグメントや比高に応じた分布の特徴、共生関係等について説明頂いた。4 題目として、芝浦工業大学の宮本仁志氏から、河川植生に関する研究の歴史的変遷、河川樹林化の課題、樹林化ワークショップの実施状況、河川植生動態モデルの研究事例等について説明頂いた。

意見交換では、河川環境の基盤でもある河道内樹林に対する伐採のあり方や、今後目標とすべき河川の姿、総合的な土砂管理の必要性等について等、意見交換が行われた。最後に、名古屋大学田代喬氏から、発表内容及び問題提起内容の整理と、発表者間での意見交換の提案があり、河道内における草本、樹木、樹林帯をどのようなバランス・配置でミックスさせるのが良いのかという観点から、河道内樹木管理の目安となる具体的な目標を明らかにしていく必要性等について意見交換が行われた。



講演①：内田 正之 氏



講演②：森 照貴 氏



講演③：吉川 正人 氏



講演④：宮本 仁志 氏



会場の様子



意見交換の様子

2. おわりに

今回のフィールドシンポジウムも各地から多くの皆さまにご参加いただき、盛況のうちに終了することができました。開催にあたり、ご講演いただいた皆さまをはじめ、関係者の皆さまには非常に多大なご支援を賜りました。特にフィールドをご提供いただいた、国立研究開発法人土木研究所自然共生研究センターの皆さま、本シンポジウムの後援となっていたいただいた国土交通省中部地方整備局木曽川上流河川事務所の皆さまには企画段階からフィールドツアーの準備、当日のご案内など多くのご支援を頂きました。心より感謝申し上げます。

最後に、今回の行事開催が盛況のうちに終了した背景には、以下のメンバーの企画・協力があったことを申し添えます。

小川遼（日本工営）、尾花まき子（名古屋大学）、可児裕（水源地環境センター）、川村昭彦（国土交通省）、小松健太（玉野総合コンサルタント）、島田立季（パシフィックコンサルタンツ）、田代喬（名古屋大学）、中村達博（建設環境研究所）、堀田大貴（建設技術研究所）、望月洋輔（いであ）、森照貴（自然共生研究センター） ※敬称略、五十音順



以上

5.6 応用生態工学会福井 地域勉強会

魚道整備による地域の川づくり～兵庫県の事例から学ぶ～

報告者：応用生態工学会福井

森田 弘樹 (株)サンワコン

1)はじめに

今回の勉強会は、兵庫県で行われている県・町・漁業協同組合・土地改良センターの協働事業による農業用井堰の魚道設置の事例について学ぶとともに、福井県での魚道設置の更なる推進のためのつながりをつくることを目的として開催しました。勉強会は令和元年 11 月 29 日に福井県福井市の福井県国際交流会館を会場として開催し、技術者や行政担当者、研究者、漁協、地域住民など 112 名の方にご参加をいただきました。

当日は、司会の田安正茂氏（福井工業高等専門学校 准教授）の進行の下、最初に田原大輔氏（福井県立大学 准教授）から本勉強会の趣旨説明があり、続いて以下の講演が行われました。

2)兵庫県但馬地域での“水辺の小わざ”魚道整備～清流の郷づくり大作戦～

松岡晃治氏（兵庫県但馬県民局豊岡土地改良センター農村計画課 主査）

本講演では、兵庫県新温泉町の岸田川などでの農業用井堰の魚道整備がどのように進められているのかを紹介いただきました。

魚道整備が進むきっかけとなったのは、漁協が繰り返し要望を出して行政や関係者に働きかけたことで、また、魚道の整備に先立ち、有識者や住民、漁協、河川および井堰の管理者で組織する協議会を立ち上げ、井堰と魚道の現状や課題を共有し、整備方針を議論したことが整備推進の土壌となったそうです。さらに、地元の町が魚道整備を地域の環境保全の重要な取組みと位置付けて財政面の負担を決断するなど、多くの関係者が実現に取り組んだことが紹介されました。



松岡晃治氏

実際の魚道整備にあたっては、井堰管理者の取水量確保に対する不安や、河川管理者の管理上の不安などを払拭するため、利害関係者が計画策定段階から参画するとともに、フォトモンタージュやイラストなどを使って整備イメージの共有を図ったそうです。また、計画策定にあたっては協議会をまとめるコーディネータの能力に負うところが大きいといったお話がありました。

魚道の型式は整備後の手直しや補修を含めた維持管理を見据え、「水辺の小わざ魚道」という小規模で効率的な手法を用いたほか、維持管理の担い手確保のための仕掛けづくりとして、地域住民と漁協、高校生が参加するイベントとして、魚道施工時の魚の引っ越し作業や魚道づくり作業の体験、モニタリング調査、アユの塩焼き大会などを開催したそうです。

最後に、現場合わせの技術である水辺の小わざ魚道の品質確保のため、共通仕様書を作り標準化を図ったとのお話があり、多くの参加者が興味を惹かれたようでした。この他、参加者からは、可動堰の場合の小わざ魚道の設置方法や、底生魚の遡上状況などについて質問がありました。

3) 農業農村整備事業における魚道型式決定までの流れ

佐々木繁一氏（福井県土地改良事業団体連合会環境計画課 課長）

本講演では、農業農村整備事業において頭首工の魚道を設計する際の流れについて講演いただき、魚道の設計にあたっては、河川の流況や対象魚種の種類や遡上時期、体サイズを考慮して魚道の構造や位置を設定することが紹介されました。中でも、農業用取水口と魚道の敷高、堰堤の堰高については、渇水時でも取水できるようにしつつ、できるだけ魚道の流量も確保する必要がある、特に設計に苦勞するというお話が印象的でした。また、維持管理の省力化のため、魚道内の土砂堆積をできるだけ回避するなど、魚道整備における具体的な注意点についても説明いただきました。



佐々木繁一氏

4) 河川内の樹木伐採における治水と河川環境の両立に向けた取り組み

橋本盛夫氏（福井県福井土木事務所河川砂防課 課長）

本講演では、国土強靱化事業として台風などの頻発する災害に対応すべく、治水対策として九頭竜川水系で実施された、河川内に繁茂した樹木の伐採事業について紹介いただきました。

伐採に際しては、治水対策と自然環境の保全の両立に配慮するため、動植物の専門家や保護活動団体等に相談したところ、それぞれの生物群で伐採を避けるべき時期や河川の流況、気象条件などを考慮すると、伐採を実施可能な時期がなくなってしまう、調整に大変苦勞されたそうです。対立する要素の調和をいかにして図るか、今後の魚道整備などにおいても大変重要な点であると感じました。



橋本盛夫氏

5) 総合質疑～福井県における協働事業による魚道設置に向けて～

総合質疑では、ご講演をいただいた3名の講師の方を中心に、田原氏のファシリテーションの下、会場の参加者を交え活発な質疑応答が行われました。また、福井県での小さな自然再生の事例として、田中謙次氏（一般社団法人環境文化研究所 代表理事）から親子参加により河川の落差解消に取り組んだ事例が紹介されました。会場の参加者からは、自然再生の成果を観光資源として活用し、経済活動に結びつけていくという視点も重要であるとの意見がありました。



総合質疑の様子

6) おわりに

今回の勉強会は当初の募集定員を大幅に上回る参加者数となり、河川環境や漁業資源の保全に配慮した河川の整備・管理に福井県内でも多くの方が関心を持っていることがうかがえました。課題は多々ありますが、今回の勉強会が今後の福井県内での魚道整備や川づくりの進展に向けたひとつのきっかけとなったのでは、との総合質疑での田原氏のまとめに深く首肯するところです。

最後に、今回の勉強会を共催いただきました（公財）福井県建設技術公社、ご協賛いただきました北陸技術士懇談会、ご後援いただきました国土交通省福井河川国道事務所、福井県福井土木事務所、福井県土地改良事業団体連合会、福井県内水面漁業協同組合連合会、ふくい技術士交流会、福井県農業土木技術研究会、福井新聞社、そして日頃から応用生態工学会福井の活動にご参加いただいている県内のコンサルタント、建設資材メーカー、建設会社、NPO、行政等の技術者の皆様に厚く御礼申し上げます。

魚道整備に棚田風井堰

応用生態工学会福井が勉強会

120人、兵庫の事例学ぶ

県内の生態学や土木工学の研究者らでつくる応用生態工学会福井は29日、福井市の県国際交流会館で勉強会を開き、魚道の効果的な整備方法について学んだ。

勉強会には、国の特別天然記念物「コウノトリの銅首繁殖事業」に取り組む同県但馬地域から、豊岡土地改良センターの松岡昇治農村計画課主査を招いた。

兵庫県を流れる2級河川「岸田川」は、落差が大きい場所など4カ所で川の連続性が分断されており、2014年から魚道整備に取り組んでいる。松岡さんは「水辺の小わさ」と銘打った施工法を紹介。緩やかな傾斜にして棚田風に石を敷いた井堰の様子を紹介し、「不整形な水の流れが生まれ、多様な魚種に対応できる。小規模ながら、効果的で効率的」と話した。

同学会福井によると、県内では関係機関の連携や施工後の維持管理を誰が担うかなどの課題があり「（魚道整備は）なかなか進まない」という。松岡さんは円滑な事業の進行や維持管理について「行政や地域が一体となることが大事」と強調。魚道の施工時に地域住民や高校生にメッセージ入りの石を置いてもらい、施工後も魚種調査などで地域ぐるみの事業に結びつけている事例を報告した。（栗原 寛）

魚道の整備事例などを学んだ応用生態工学会福井の勉強会
＝29日、福井市の県国際交流会館

勉強会の様子を伝える新聞記事（福井新聞、令和元年11月30日掲載）

5.7 応用生態工学会新潟 勉強会

生態系ネットワークと地域再生 開催報告

報告者：応用生態工学会新潟 普及・連携委員

原 文宏 (株)建設技術研究所

■ 勉強会の趣旨

応用生態工学会新潟では、現在北信越地区 5 県（新潟、富山、石川、福井、長野）の持ち回りで「北信越ワークショップ（WS）」を開催しております。新潟地域では 2016 年（平成 28 年）に WS を開催し、本年はその中間年にあたり、WS は再来年 2021 年に開催する予定です。

そこで 2021 年（令和 3 年）の WS に向けたキックオフとして、「生態系ネットワークと地域再生」をテーマに、学識者および、行政と民間の専門家をお招きして開催しました。

応用生態工学会新潟が目指しているところは、生態学と土木工学等の融合による地域の持続可能な開発に貢献することです。越後平野特有の生態系ネットワークを活かしながら、今後の人口減少社会に向けて地域再生に資するための施策や技術、それぞれの役割を考えるために勉強会を開催しました。

■ 勉強会

- 日 時 2019 年 12 月 10 日（火）14 時～17 時 30 分
- 場 所 新潟大学駅南キャンパス「ときめいと」（講義室 A）
：新潟市中央区笹口 1 丁目 1 番地 プラーク 1 2 階
- 参加人員 42 名
- 後 援 国土交通省北陸地方整備局、（一社）建設コンサルタンツ協会北陸支部
新潟県ビオトープ管理士会

■ プログラム

- 14:00～14:05 開会
- 14:05～14:55 講演①「生態系ネットワークとは何か（他県の事例紹介）」
（公財）日本生態系協会 理事（専務）関 健志氏
- 14:55～15:30 講演②「白鳥が教えてくれた～越後平野は Wetland～」
新潟県水鳥湖沼ネットワーク事務局長 佐藤 安男氏
- 15:30～15:40 休憩
- 15:40～16:15 講演③「越後平野における生態系ネットワークの推進に向けた取り組み」
国土交通省北陸地方整備局河川部建設専門官 越野 正史氏
- 16:15～17:05 講演④「越後平野における生態系ネットワークが目指すところ」
新潟大学 農学部 教授 関島 恒夫氏
- 17:05～17:25 総合討論 進行：新潟大学 農学部 教授 関島 恒夫氏
佐藤 安男氏、越野 正史氏、関 健志氏は所用のため講演後退席
- 17:25～17:30 閉会

■ 講演概要

- （1）「生態系ネットワークとは何か（他県の事例紹介）」

エコロジカル・ネットワーク（生態系ネットワーク）は、欧米の地域計画・国土計画等を参考にした生物多様性の効果的保全・回復手法である。「21 世紀の国土のグランドデザイン（1998 年に閣議決定）」で初めて、国の計画にも記述された。

これまで全国の 9 地域で取り組まれ、2019 年から始められた越後平野の取り組みは 10 番目である。

地域の生態系ネットワークを形成し推進するためには、首長がキーパーソンとなって行政のみならず、地域住民、NPO、銀行、電力会社、JR、JA、観光業（DMO）、マスコミ等が参画し、地域経済の活性化に結びつく指標、例えば、関東地方では「朱鷺とコウノトリを飛ばすこと」を設定し、各参加者が主体的に活動することが重要である。また、地域に周知するために、活動が新聞の 1 面に掲載される記事となることも重要である。越後平野では、前例にとらわれず、越後平野特有の環境を生かした生態系ネットワークを形成し、地域が活性化することを期待する。



（2）「白鳥が教えてくれた～越後平野は Wetland ～」

越後平野には白鳥が飛来し、田んぼでエサをとり川や点在する潟をねぐらにする。飛来するハクチョウ類は国内で平均 66,879 羽、その内 36,731 羽のコハクチョウの 41%が新潟県で越冬する。営巣地のツンドラ地帯では 9 月から厳冬期を迎え渡りが始まる。その頃、新潟平野では稲刈りが始まりコンバインからの落穂や二番穂がエサになる。越冬期間は天候や積雪状況で点在する潟を移動する。子供達へはラムサール条約の「持続可能な利用」を紙芝居風にして説明している。SDGs 達成を視野に潟の食文化や体験を通じ、環境、観光、教育、健康、福祉、アートなどをキーワードに、ワイズユースと生物多様性を考え、越後平野を新潟の未来の子供達へとつなげていきたい。



（3）「越後平野における生態系ネットワークの推進に向けた取り組み」

越後平野における取り組みに向け、農作物・河川～水田への連続性・ラムサール条約登録地として参考となる 2 つの事例を紹介する。

1. 兵庫県豊岡市円山川流域では、河道掘削を工夫した湿地の創出や国・県・市の連携による河川～水路～水田の連続性確保によって魚を呼び込んだことによるコウノトリの採食場の確保、減農薬・無農薬による農作物の栽培やお酒の製造・販売を行った結果、売上が 10 年で 16 倍となった。2. 島根県出雲市など 5 市 2 県を含む斐伊川流域では、ラムサール条約登録湿地であり、ガン類、ハクチョウ類、コウノトリ・トキ類等複数の大型水鳥が確認されている宍道湖・中海における生息環境づくり。環境づくりに合わせた、観光・農業地域振興による地域活性化に着手したという。



事務局では平成 26 年から生物系ネットワークの取り組み検討を始め、令和元年に推協議会を設立。今後、推進協議会の下に、河川の流域ごとの協議会やワーキンググルー

プ等の下部組織を設置し、フットワークの軽い体制を整えていく予定である。各種機関の連携と協同で、現状の問題に対する短期・中期・長期目標を達成し、指標種の生息環境の保全と地域の賑わい創出・活性化という到達目標を達成したいと考えている。

(4)「越後平野における生態系ネットワークが目指すところ」

生態系ネットワークとは、野生生物の生息地間の連続性のある空間的なつながりをいう。越後平野が全国 10 番目の候補地になる。指標種はハクチョウ類とトキである。白鳥はアピール度が高くシンボリズムで一般受けしやすい。大型水禽類の利用環境特性の説明は統計モデルが重要である。これによって潜在的な生息適地と次善環境を把握し保全優先地域を把握できる。エサ環境は DNA バーコーディング法を用いて餌植物の構成比率を把握し特別な生態系ネットワークが必要か調べる。「地域の安全」と「人口減少」は密接な関係があり、EcoDRR（生態系を活用した防災減災）が必要である。生態系ネットワーク形成から新たな生態系サービスと地域活力の創出へつなげていくことが必要である。



(5)「総合討論」

■佐藤氏（新潟県水鳥湖沼ネットワーク事務局長）

福島潟周辺の水田では、この10年間、冬季湛水をしていることから、ハクチョウ類が水田をねぐらにするようになった。また、オオヒシクイも飛来している。こうした環境変化も注目してほしい。

■越野氏（国土交通省北陸地方整備局河川部建設専門官）

北陸整備局では、越後平野の生態系ネットワーク形成のための全体構想を策定している。また、今後はJA、銀行、メディアなどの多様な機関を巻き込んでいきたい。

■関島氏（新潟大学農学部教授）

水田が広がり、ハクチョウが飛来している新潟の景色は特徴的で素晴らしい。この素晴らしさに地域

の人が気づいていないと感じている。この素晴らしさに気づいてほしい。加えて、生態系サービスが、新潟の将来の発展に寄与すると考えている。今後、北陸地方整備局では、越後平野生態系ネットワーク形成のため骨格を検討していく予定である。ここにいる方々にも、参画いただく機会があるので、是非協力頂きたい。



会場からも多くの質問、意見等が出され、活発な総合討論となり、有意義な勉強会とすることができました。

6 谷田先生 名誉会員に推戴

名誉会員は、学会規約第 5 条の規定に基づいて、「本会並びに応用生態工学の発展に大きな功績があった個人のうちから、理事会の推薦により、総会において決定される」こととされています。

本年 8 月 19 日～26 日に開催された第 99 回理事会（メール会議）において、本会並びに応用生態工学の発展に大きな功績があった谷田一三先生について、名誉会員への推薦を決議し、第 23 回総会において承認されました。

谷田一三先生

(1) 現職：大阪府立大学名誉教授

(2) 専門：河川生態学、昆虫分類学

(3) 功績：谷田先生は、本学会（研究会）発起人として会の立ち上げに尽力され、また、発足時の幹事長を 2 期 4 年、理事を 1 期 2 年、副会長を 4 期 8 年、会長を 1 期 2 年務められ、応用生態工学会の骨格づくりに寄与され、応用生態工学の発展に大きく貢献されました。

現在、名誉会員には、川那部浩哉先生、廣瀬利雄先生、山岸 哲先生、近藤 徹先生、池淵周一先生、小倉紀雄先生、玉井信行先生、森下郁子先生の 8 名が在籍されています。

7 2019 年度行事

2019 年度（令和元年度）行事の経過と今後の予定

4. 1	2019 年度（平成 31 年度）開始
4. 2	第 1 回第 12 期次期役員募集・推薦委員会（麹町：応用生態工学会事務所）
4. 5	応用生態工学会 第 23 回大会第 2 回実行委員会（広島大学 東広島キャンパス）
4. 19～20	<共催・応用生態工学会札幌>若手の会「若手のつどい勉強会 2019」 （北海道大学工学部、豊平川）
4 月	国際交流委員会（メール会議），2019 年度海外学会等への派遣者決定
5. 1	2019 年度（令和元年度）開始
5. 18～19	テキスト刊行委員会 第 2 回中小河川テキスト会議（九州大学西新プラザ）
5. 23	第 81 回幹事会（麹町：応用生態工学会事務所）
5. 28	ニュースレター 84 号発行
5. 29	会誌編集幹事会（麹町：応用生態工学会事務所）
5. 31	<共催・会誌編集委員会>応用生態工学会札幌 「第 1 回北海道の応用生態工学 掲載論文の解説と展望 その 1」 ～「小さな自然再生」と「きっと役立つ省力化のモニタリング技術」～ （札幌エルザプラザ）
6. 1～6. 30	第 12 期次期役員候補者募集
6. 28	第 98 回理事会（麹町：弘済会館）
7. 16	応用生態工学会 第 23 回大会第 3 回実行委員会（復建調査設計(株)別館）
7. 18	第 2 回第 12 期次期役員募集・推薦委員会（麹町：応用生態工学会事務所）
7. 26	2018 年度決算監事監査（麹町：応用生態工学会事務所）
7. 28	会誌「応用生態工学」Vol. 22-1 発行
8. 2	第 82 回幹事会（麹町：応用生態工学会事務所）
8. 7	ニュースレター 85 号発行

8. 8～9	テキスト刊行委員会 第 3 回中小河川テキスト会議 ((国研) 土木研究所 自然共生研究センター)
8. 19～26	第 99 回理事会 (メール会議)
8. 31	応用生態工学会仙台 『仙台湾南部海岸環境追跡プロジェクト～東日本大震災後の砂浜環境について～』 (仙台湾南部海岸)
9. 12	応用生態工学会 第 23 回大会第 4 回実行委員会 (広島大学 東広島キャンパス)
9. 13～14	応用生態工学会長野 第 18 回現地ワークショップ in 長野 (信州大学繊維学部)
9. 27～30	応用生態工学会 第 23 回大会 (広島大学東広島キャンパス) 9 月 27 日 (金) : 自由集会、ポスターコアタイム、各委員会 9 月 28 日 (土) : 口頭発表、自由集会、若手の会ランチミーティング、懇親会 9 月 29 日 (日) : 午前: 役員会 (現)、第 23 回総会、役員会 (新)、表彰式 午後: 公開シンポジウム 9 月 30 日 (木) : エクスカーション (温井ダム、広島西部山系砂防施設、汽水域干潟)
9. 27	会誌編集委員会 (広島大学東広島キャンパス)
9. 27	第 1 回普及・連携委員会 (広島大学東広島キャンパス)
9. 28	テキスト刊行委員会 (広島大学東広島キャンパス)
9. 28	将来構想委員会 (広島大学東広島キャンパス)
9. 29	第 83 回幹事会 (広島大学東広島キャンパス)
9. 29	第 100 回理事会 (広島大学東広島キャンパス)
9. 29	第 23 回総会 (広島大学東広島キャンパス)
9. 29	第 84 回幹事会・第 101 回理事会合同会議 (広島大学東広島キャンパス)
10. 30	<後援・近畿地方整備局>令和元年度多自然川づくり近畿地方ブロック担当者会議 (大阪合同庁舎第 1 号館 第 1 別館)
11. 1	第 24 回札幌大会第 1 回実行委員会 (北海道大学工学部)
11. 1	応用生態工学会札幌 第 2 回北海道の応用生態工学 全国大会の発表を札幌でも その 1 (北海道大学工学部)
11. 7	<共催・河川生態学術研究会>第 22 回河川生態学術研究発表会 (東京大学農学部弥生講堂・一条ホール)
11. 8	応用生態工学会金沢 第 4 回北信越事例発表会 in 石川 (IT ビジネスプラザ武蔵)
11. 8～15	第 102 回理事会 (メール会議)
11. 12	応用生態工学会富山 「氾濫原テキスト」勉強会 (新川学びの森天神山交流館)
11. 14	第 2 回普及・連携委員会 (日向市中央公民館)
11. 14～15	第 11 回全国フィールドシンポジウム in 耳川 「いい耳川をめざして! 流域一体となった総合土砂管理による河川生態系の再生 ～世界初! 3 ダム連携通砂事業の現場を見る～」 (日向市中央公民館・耳川)
11. 26	応用生態工学会名古屋 フィールドシンポジウム in 自然共生センター (自然共生センター、国営木曽三川公園 138 タワーパーク)
11. 29	応用生態工学会福井 勉強会 「魚道整備による地域の川づくり」 (福井県国際交流館)
12. 6	連続セミナー 第 8 回「環境の未来を考え・語る会」 ((一財) 水源地環境センター)
12. 10	応用生態工学会新潟 勉強会 「生態系ネットワークと地域再生」 (新潟大学駅南キャンパス)
12. 23	第 85 回幹事会 (麴町: 応用生態工学会事務所)
12. 24～27	第 103 回理事会 (メール会議)

2 月	ニュースレター86 号発行
1 月	会誌「応用生態工学」Vol. 22-2 発行
2 月	理事会
2 月	ニュースレター87 号 発行
2 月～3 月	2020 年度海外学会等への派遣員の募集
3. 31	2019 年度（令和元年度）終了

8 事務局より

8.1 いつもながらの勤務先等の会員情報変更登録のお願い

会員情報の変更登録は、ホームページのトップ画面右上の「入退会・登録変更・購読」バナーから入り、「会員登録情報変更フォーム」から入力して送信してください。

また、下記 URL で「会員登録情報変更フォーム」へ直接接続することもできます。

<https://www.ecesj.com/FS-APL/FS-Form/form.cgi?Code=change>

会員情報変更のご連絡は、学会事務局のアドレス E-mail : eces-manager@ecesj.com にメールをいただくことでも可能です。

会誌のお届け、ニュースレター、その他連絡では、かなりの不達が発生しています。よろしくお願いいたします。

8.2 退会の申し出は学会ホームページの退会フォームからお願いいたします

退会の申し出については、退会フォームのほかに、事務局へのメール、電話、年会費払込請求書の通信欄に記載等でなされています。事務局の見落とし等の原因の元になりますので、できるだけ退会フォームまたは件名に「退会の連絡」等明示したメールによる申し出をお願いいたします。

8.3 既刊学会誌を希望する会員に頒布します（郵送料は負担してください）

学会事務局では、既刊学会誌の在庫整理を進めています。今後は一定の冊数を確保して、残りは希望者への頒布、廃棄を考えています。希望者多数の場合は、先着順です。

希望される会員は、学会事務局のアドレス E-mail : eces-manager@ecesj.com までお知らせください。申込者には、事務局から郵送料を計算してお知らせします。郵送料をいただいた後、発送します。

8.4 会員数および LEE 購読者数

2019 年 12 月 27 日現在

	会員数	対前年同時期比較	LEE 購読者数	対前年同時期比較
名誉会員	9 名	増 1 名	2 名	増 1 名
正会員	876 名	減 55 名	70 名	減 10 名
学生会員	93 名	減 52 名	3 名	増 1 名
合 計	978 名	減 106 名	75 名	減 8 名
賛助会員	43 法人 (62 口)	増 1 法人 (増 2 口)		